

第7章 光！

瞑眩^{めんげん}して病癒ゆ

瞑眩と共に虚劳からの回生

——半世紀死火山となりしを轟とどろきて煙くゆらす歌の火の山——

ほとばしるような回生の歌である。脳出血で倒れてのち回生した女流歌人の歌集にこの歌を見つけたとき、私は火の山ならぬ燃ゆる星からこの地上に降りしく光のエネルギー、太陽の大いなる陽に想いを馳せた。

「陰多くして陽少なし」の虚劳の体に、太陽の大いなる陽が付与されると必ず瞑眩が起きる。瞑眩はそれまで眠っていた自然治癒力が喚び覚さまされて、正常復帰への回生の働きが始まったことの証左——好転反応である。漢方の古典に「葉瞑眩せざればその病癒やまいえず」とある。瞑眩があつてはじめて、病気がよくなることを言つたものである。

漢方治療のみならず食餌療法にあつても、それが体質の虚実や病位の陰陽に合っている

ときは瞑眩が見られる。これは生薬（漢方の用薬）や食（食餌療法）といった自然物による治療のときに現れる現象であつて、このことによつても「薬食同源」の理が知られる。

それに引きかえ、化学薬品には瞑眩はない。したがつて、現代医学にはこの現象に注目することがない。瞑眩はいわば外からの治療の働きかけに対する、生体の内からなる自然の反応なのであるから、体にとつて瞑眩の有る無しは、治療法の善し悪しを分けることになると言える。

とはいへ、瞑眩はそうめつたやたらにあるものではない。およそ物質の生体に与えるインパクトは、その物質が単純なほど劇的で、複雑なほど緩慢である。生薬の成分は複雑で不明な成分も多く含まれる。食物にしても同じである。

したがつて、漢方治療にしても食餌療法にしても、それがその人の病状にびつたり合つたものであつても、それだけでは瞑眩の発現を見ることはない。これはつまり、そうした漢方の生薬にしても食材にしても、生体に対するインパクトが緩やかであるからである。

ところが、生命素の相補的医療にあつては瞑眩が必発する。このことは、この治療法の生体に与えるインパクトがいかにか的であるかを物語るものである。瞑眩の発現と共に、体調は打つて変わつてよくなる。この治療法による瞑眩はおよそ次の如くである。

1、体が温かくなる。

太陽の大きいなる陽の摂取は内からの日向ぼっこである。急なるときは発熱といつてよいほど体温が上がる。陽不足で沈衰していた代謝が、陽の充足と共に活発になった証。ときに眠気や倦怠感を伴うことがあるが、自然に止む。

2、尿量が増える。

太陽の光エネルギーの直接摂取は、普段はわずかなものでしかない動物（人）における光合成を活発にする、光合成の初段階である脱水素（体内の水分から水素を脱き取る働き）によって生じた活性水素は、直ちに体内の活性酸素と結びついて水となり、尿として排出される。

この働きが急で、体内で産生される水があまりにも大量のときは、下痢の形で腸管から排出される。それでも排出し切れないときは、一時的に浮腫となる。こうした現象は、体内浄化の働きであるから自然に止む。これに勝る活性酸素消去の働きを私は知らない。

活性水素のもう一つの特筆すべき働きとして、細胞を若返らせることが知られてい

る。生命素をのむと若返るのはこのためである。

なお、まれに尿量が減ることがある。これはいわゆる「水持ちの悪い体」が「水持ちの良い体」になる現象で、太陽の大いなる陽という大自然の働きは一方通行ではないことを物語る。その人の体質に応じて、そのときの体の状態に応じて、水捌はけをよくもするし、水持ちをよくもする。

3、痰や膿汁、瘀血の排出がある。

喘息や気管支炎の痰、蓄膿症や中耳炎の膿汁、それに瘀血など、体内にあつて治病の妨げになっているものが排出される。

以上の如き瞑眩には、心地よいものとそうでないものとあるが、膿汁や瘀血の排出など、出し切つてしまえば自然に止む。瞑眩は軽いときはそれと知らぬ間に過ぎてしまふ。

ともあれ、瞑眩はそれまで眠っていた自然良能が急に喚び起こされて大活動を開始したことの証である。喜んで受け入れ、それと共に現れる全身状態の好転を期して待つべきである。

重ねて言う、「瞑眩なければその病癒えず」と。軽重の差はあれ、何らかの好転反応があつてはじめて病は治癒に導かれるものである。それも、これまでの漢方治療にあつても食餌療法にあつても稀にしか見ることがない瞑眩が、生命素の相補的医療にあつては必発する。このことは、この治療法が生命の在りように適っていて、その働きがいかに透徹したものであるかを物語るものである。

